

高次脳機能障害者家族の介護負担と支援方法に関する考察

- 高次脳機能障害者家族へのインタビュー調査を通して -

神奈川県リハビリテーション病院 医療福祉総合相談室 瀧澤 学 (006473)

キーワード：高次脳機能障害 介護負担 グラウンデッドセオリー

1. 研究目的

高次脳機能障害者支援では、2003年に高次脳機能障害支援モデル事業、2008年より高次脳機能障害支援普及事業が施行されているが、それらの事業施行には2000年に設立された日本脳外傷友の会の活動が寄与していると言える。この背景には、見えづらく分かりづらい障害への啓発、家族の介護負担の大きさへの対策、社会的・制度的な不利益に対して声を上げることが難しい当事者の代弁機能を果たしていると考えられ、それらの経過は書籍にまとめられている(NPO日本脳外傷友の会:2010)。そして近年、高次脳機能障害は障害者福祉制度や社会保障制度の対象として認知されつつある。

他方、高次脳機能障害者家族の介護負担は否定的感情、社会生活の制限、情緒的圧迫感、介護意欲という4つの側面から構成されており、さらにこれらの構造は痴呆性高齢者の介護負担の構造を一部相似している(赤松,小沢,白澤:2003)。白山(白山:2010)は「高次脳機能障害者家族に面談調査より、介護負担は認知症家族と近似し、要介護高齢者家族に対して30~60%大きく、うつ傾向が認められる家族は56.7%存在する。さらに、介護負担感増大、精神健康の低下との関連が認められ、その要因は当事者の社会的行動障害が影響している」と述べている。鈴木ら(鈴木,種村,元村:2010)は、家族へのアンケート調査より、当事者と家族双方にとってストレスを生じない関係の再構築、他者との関わりに影響を及ぼす日常生活の介助方法指導、介護を維持する体調管理が必要であり、介護生活が始まる初期段階からの援助が重要としている。これらより、高次脳機能障害者家族の負担感については、量的研究の側面より認知症高齢者の介護負担に相似しており、社会的行動障害への対応、本人と家族双方の関係の再構築、介護生活初期段階から支援が必要であることが確認されている。しかし、家族の介護負担の内実に着目した質的調査を行ったものは少ない。

本調査は、高次脳機能障害者家族へのインタビュー調査を行い、具体的な介護負担の実態や支援方法を検討することを目的とした。

2. 研究の視点および方法

調査対象は高次脳機能障害者家族8名(母親7名,父親1名,家族会会員)であり、当事者の受傷からの経過年数は平均11年,受傷原因は脳外傷(自動車事故6名,自転車転倒1名,クラブ活動中の事故1名),受傷時の当事者の属性として学生4名,社会人4名,受傷時平均年齢は22.8歳(15~30歳),調査期間は2010年2月から8月であった。

インタビュー調査について、調査対象者に半構造化した質問を行い、それらをICレコーダーに録音したものを逐語録とした。インタビュー時間は合計498分(51分~82分,平均62分),文字数は合計177,510文字であった。そして、データをストラウス・コービン版グラウンデッドセオリーにて分析を行った。

3. 倫理的配慮

調査対象者に書面と口頭による趣意説明を行い、同意書に署名をいただいた。

4. 研究結果

インタビュー調査の分析結果より「高次脳機能障害者と向き合う生活」の概念が生成された。受傷後、家族は「本人を支えることの期待と不安」を抱いていた。退院後、自宅での生活を送る中で「本人の生活課題と対応」に翻弄される、本人にどのように対応して良いのかわからない中で「家族の思いが揺れ動く」ことを体験していた。そのような中で「関係者との関わり」を通じて家族会や専門職からアドバイスを受ける、「社会資源の活用」によって本人と適度な距離を置くことより「本人から離れることの必要性」を具現化する、時間経過やリハビリテーションの効果の中で「本人の変化から見いだされる前向きな思い」を感じることで精神的な安定を得るに至っていた。しかし、本人の出来ることが増えていかない、思うような変化をしていかないことで「変化のない本人への苛立ち」を感じ、本人を支えることの不安を再燃するに至っていた。

高次脳機能障害者の症状については、わかりづらく見えにくいという、個別性が高く、統一した対応方法が存在せずオーダーメイドの支援や関わりが要されることが、対応をより難しくしている。それでも、自宅や住み慣れた地域で生活していくためには、本人への対応方法や関わり方の支援を十分に行える体制が必要となる。ただ、対応を身につけただけでは不十分であり、本人に必要な制度利用や今後必要とされる取り組みや関わりについての情報を家族会や専門職から得ることで、先の見通しが持てる仕組み作りが肝要である。また、介護者の負担感を軽減する方策として、家族間で上手な役割分担等ができるような方策を検討する、福祉サービスを利用する等で安心して本人から離れる時間を持つことが有用である。

今後の課題であるが、本調査では金銭的な課題について語られることは少なかった。調査対象が高次脳機能障害者の親であり、生計維持者が受傷した場合と異なり、家族が生活に窮するような事態には至っていないことがその要因と思われる。さらに、家族会への未加入者がどのような対処方法を講じているのかについても、今後の課題であり、異なる層を対象とした調査を行う必要があると考える。

参考文献

- 1) NPO 法人日本脳外傷友の会編(2010)「高次脳機能障害とともに」せせらぎ出版,48-52
- 2) 赤松昭,小沢温,白沢政和(2003)「脳損傷による高次脳機能障害者家族の介護負担感の構造」社会福祉学 44(2)
- 3) 白山靖彦(2010)「高次脳機能障害者家族の介護負担に関する諸相」社会福祉学 51(1)
- 4) 鈴木雄介,種村留美,元村直靖(2010)「在宅外傷性脳損傷患者の介護者における精神的健康度と関連要因」厚生学 57(4)